



炎とは飛びたがるもの松例祭
滝の前髪をほどきて佇つ女
林檎摘果終へて光陰走り出す
憲法の日海辺のフリーマーケット
絵の中の窓にも夏の来てゐたり
地に足のつかざる虹のブルースよ
祀りたる泥の神様島佳日
夏空にヤッカヤッカの神歌かな
厨わがひと世のとりで山椒魚
沖縄忌烈火のごとく草の立つ
田植時働きながら癒す傷
青春を置いてきぼりや初夏の葬
祭あと家中の影の濃くなりぬ
*

小林貴子
佐藤映二
矢島 恵
鏑木ひろこ
酒井和子
伊藤由希子
篠遠良子
渡久山和子
依田ひろ
岩上諒磨
後藤行雄
諏訪坂恵子
高橋節子
篠遠早紀
若尾伸子

打桶のしぶき虹生む能登晩夏
青葉照る憂さを持ち寄りバーベキュー
なつかしき人は瘡蓋梅雨穂草
噴水の光の粒の天女かな
夏夕べ見つかりに出るかくれんぼ
燕子花我逝く時も前のめり
羽優し食ひ残さるる揚羽蝶
麦秋の沙界の音を吸ひこめり
ウエディングドレスのごとく袋掛
さくらんぼ加藤登紀子のほろ酔コン
空の下待つ夕暮の夏行かな
捨て方のわからぬ恋と香水と
目薬のあとの目配せ燕の子
人絶えて涌水の音夏灯
鶏のふと貌出すや夏座敷

有手 勉
坂口裕子
高瀬かず枝
塩澤祐子
山田春草
丸山貴史
下川治美
柴田洋子
平山広子
瀬野 史
田多井久美子
森山夕香
坂井久男
馬場雄治
下島 健

新たな半世紀へ—— 俳句八月

同人集・岳集から (552) 宮坂 静生

巻頭言 八月号の「岳集」の選句が終わり、七月十二日の夜、NHKテレビ番組タモリ・山中伸弥の「AIは人間を超えるか」を見た。最先端のAI技術開発の専門家がこまで、人間にAIの頭脳が近づいているという紹介のあと、課題を出し、その人物に成り代わってAIが答える場面が面白かった。課題は記憶にないが、例えば「未来」を信長はこう、タモリはこうと、その人物らしく答えるのである。なるほどと感心する。が、顧みるといかにもそれらしい。言葉という知識でまとめ上げている。予測できることであるが、生気がない。愛しさを感じる心がない。生身の人間ならば予期できない意外性がある。俳句表現を思い浮かべながら感じたことは、生きている者が発する言葉には偶然の面白さがあるが、AIはただ、わかりやすく巧みに言葉が並べられているだけ。血が通っていない。

俳句界もどこかAI俳句に似てきているのではないかな。

宮古島の泥神様・パーントゥに惹かれる

祀りたる泥の神様島佳日 篠遠 良子

『沖繩歳時記』（沖繩県現代俳句協会編）によると、宮古島平良島尻で旧暦九月（現十月）に催されるのが泥の神祭。出会った人に泥をつけることで厄払いをする。臭いつる草を身にまとい、泥を塗り、集落を廻る。パーントゥは妖怪の意であるが、幸せを齎す鬼でもある。掲句は泥を塗られながら厄

払いの日に出会えて嬉しいとの旅吟であろう。払いたい厄を持つ生身の人間には厄払いへの秘めた願望がある。

滝の前髪をほどきて佇つ女 佐藤 映二

神秘的洋画にもある。あるいは泉鏡花「高野聖」風な深山の滝壺を前にした妖艶な美女とも連想が広がる。今までの佐藤映二にはない句材である。なにか宮沢賢治モラルから自由になり、みちのくの山中に分け入った趣を感じる。聖女の俤か。

炎とは飛びたがるもの松例祭 小林 貴子

大晦日から元旦にかけて出羽三山神社で行われる歳夜祭。山伏による修験特有の行事である。百日お籠りの行をした二人の「松聖」（位上・先途という）のどちらが神意を体得したか、鳥飛びなどいくつかの験競べ神事を行う。中でも、火祭のクライマックスは風土病の「つつがむし」を象る大松明を鑽火の火で焼き、新しい年を寿ぐ。「大松明引き」から「火打替神事」。掲句は時期的には年末年始の行事であるが、珍しい地貌季語「松例祭」を詠う。

林檎摘果終へて光陰走り出す 矢島 恵

林檎農家では夏の摘果が終わると、晩秋の収穫へ、俄かに月日が飛ぶように過ぎる。農家とは主要作物により暮らしが廻っている。巧みな句である。

憲法の日海辺のフリーマーケット 鏑木ひろこ

言葉のバランスがいい。人権を護る憲法は当然生活の自由な雰囲気をする。これは些事ではない。海辺のフリーマーケットで買物をし、楽しく暮らせるとはすがすがしい。絵の中の窓にも夏の来てるたり 酒井 和子

爽やかだ。絵の中の窓には青山がある。小品を愛しむ慎ましさにぴりっと精神が張りつめている。巧い。

夏空にヤッカヤッカの神歌かな 渡久山和子

宮古の多良間島の豊作と健康祈願の祭唄である。四月三十日から五月一日、「ヤッカヤッカ」の神歌の囃しで角皿の神酒を交わし、祭は最高に盛り上がる。地と空と海が一つにな

って。

厨わがひと世のとりで山椒魚 依田 ひろ

今月の秀句

地に足のつかざる虹のブルースよ 伊藤由希子

どこかで聞いた「虹を夢みて生きた日よ」（美空ひばり）のメロディーが懐かしい。「地に足のつかざる」とは、好きな「虹のブルース」を聞くと浮かれるという意であろうが、いつまでもそんな夢を追いつける自分を顧みた句ともとれる。齢をとるのに相応に深まることがないわが身を愛しんでいる。

た山椒魚の哀しみを自覚しながら、厨わがひと世の岩との覚悟にかえて新鮮さを感じる。

沖繩忌烈日のこつく草の立つ 岩上 諒磨

六月二十三日、沖繩戦が終わる、沖繩敗戦日。「慰霊の日」というが、草は怒りを納めていない。この大地の荒廃をどうしてくれると、燃え盛る火のように怒り狂っている。

田植時働きながら癒す傷 後藤 行雄

忙しい農家の田植時。働くことで傷を治し癒す。休むのではない。まともなことをズバリというたくましさがある作者。なよなよしない生きる勁さを信条にしている。

青春を置いてきぼりや初夏の葬 諏訪坂恵子

若くして逝去した者への言葉にならない思いをおつける。青春がまるごと手付なしとは切ない。これまでの人生とは何であったのか。初夏の盛んな季節にこの世を去るとは。

祭あと家の中の影の濃くなりぬ 高橋 節子

晩夏。明るい日だ。祭が終わる住まいの柱や戸障子の影がくつきりと際立ってくる。家屋もほっと齡をとった感じ。この落ちつきが好きだ。人はこんな風に生きている。

人が懐かしいとはどんな思いか、ふと立ち止まって考える。

なつかしき人は瘡蓋梅雨穂草 高瀬かず枝

大胆な句に驚く。懐かしいとは思いが過去から続いていることを思わせる。その人が今は瘡蓋とは、剥がしたい思いが

あるのであろうか。「梅雨穂草」は年の半ばで穂をつけ、枯れる。掲句からは前向きに意欲が感じられる。俳人がとらわれるもやもや感がない。さっぱりしている。

「なつかしき」とは英語やフランス語に翻訳できない日本語特有の日本的感性を表現する形容詞といわれる(『日本的感性』佐々木健一、中公新書)。万葉集には「春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ野をなつかしき一夜寝にける」(山部赤人)他十八例あるが、平安歌人には用例が少なく、新古今和歌集には「例もないという。現代語としては多用され、注目される言葉だ。

今月の季句

甘藍を抱き立ち尽くすあゝ癌か 篠遠 早紀

自分のことか、あるいは身近な人への感慨か。ただごとではない場面に遭遇している。前者だと「あゝ癌か」と回想伝聞形の表現にはならないのではないかと。

甘藍を抱え、そこで病状を聞いた。やはりという、もしやの思いが的中した眩きであろう。早紀の母良子さんがその人。氣丈夫であり公表しているから書いているが、子として心配は深い。早い発見により治療は完治する。が、当人や肉親の苦しみは想像を超える。作者早紀さんの前向き、堂々たる生き方に教えられる。母のその後は良好と伺っている。

燕子花 我逝く時も前のめり 丸山 貴史

なかなかの迫力。思わず唸った。さてなんと鑑賞したものか、はたと迷うのである。十分に生きた。やることもやった。思い残すことはない。はいさよならよとスーダラ節のおじさんのようにはいかないのではないかと。鈴木六林男の「天上も淋しからんに燕子花」を連想しながら。

羽優し食ひ残さるる揚羽蝶 下川 治美

残酷である。美しい揚羽蝶の羽が残されている。蜘蛛か蟻螂か。あるいは小鳥か。揚羽蝶も食べられて本望とは思わないであろう。人間社会の残忍さまでも思う。着想が優秀。

麦秋の沙界の音を吸ひこめり 柴田 洋子

広大な麦秋の大平原。ガンジス河の無数の砂のような現の無限の音を余さず吸い込む。インドかウクライナか。一日も早い平和を願う句である。

ウエディングドレスのこつく袋掛 平山 広子

比喩が華やか。果樹の袋掛が終った直後の果樹園の初々しさ。ふわっと純白なウエディングドレスが掛けられた感じ。幸せだなあと思わず眩く。作者の心中もとびきり明るい。

さくらんぼ加藤登紀子のほろ酔コン 瀬野 史

観客もともにお酒を飲みながら、全国を回る高名な「ほろ酔コンサート」。加藤登紀子にはさくらんぼが似合う。山形県でもあったものか。琵琶湖周航の歌か、遠い祖国か、いつも加藤の歌うメロディーが聞こえてくる。一九六〇年安保反対のシブプレヒコールと絢交ぜになって。ラフな中に芯があ

夕まずめ 林檎摘果の長梯子 若尾 伸子

夕方を「夕まずめ」とは音感がいい。懐かしい言い方。その土地その土地の夕方がある。日没ぎりぎりまで長い梯子を木に掛け梢の林檎を摘果する。夕方の感じは梢が敏感か。ついで働きすぎるのではないか。

打桶のしづき虹生む能登晩夏 有手 勉

塩を取るために海水を塩田に撒く桶である。海水から虹が生まれる。風情がある。時は晩夏。背景は能登の外海であり、果ては東シナ海の大海原が拡がる。地震津波の復興は叶ったか。故郷への思いが篤い作者だ。

青葉照る憂さを持ち寄りバーベキュー 坂口 裕子

夏は青葉茂る川辺などでバーベキュー。「憂さを持ち寄る」が愉快。憂さがわいわい。憂さが転じて元氣回復とは、現代的だ。バーベキューくらい庶民感覚が親しい。

噴水の光の粒の天女かな 塩澤 祐子

噴水を包む日の輝き。水滴の輝きを「天女」とは美しい。光景を掴むには作者の意欲が問われる。清新そのもの。

夏夕べ見つかりに出るかくれんぼ 山田 春草

日が暮れてくる。待っても鬼が探してくれない。「もういいよ」が聞こえないのかしら。心配になったのである。「見つかりに出る」が秀逸。ゲームばかりに入れ込んでいる子にこんな光景がわかるかしらと作者は思っている。

る。

空の下待つ夕暮の夏行かな 多田井久美子

ドイツ在住の作者。ご夫妻で俳句に励むのも微笑ましい。夏七十五日の俳句修行が私には夏行だというのである。ドイツは白夜のような夕暮であろう。

捨て方のわからぬ恋と香水と 森山 夕香

ひよいと捨つても捨てるのはばいとはいかないのが恋。好きだった香水にも恋の名残惜しさがある。現代の空気を伝えて、肌で感じる実感がいい。人生は小骨で苦労する。

目薬のあとの目配せ燕の子 坂井 久男

ぱちくりを繰り返して、沁みる目薬。燕の子を見上げながら。どこかおばあちゃんの知恵が潜む俳味がある。

人絶えて涌水の音夏灯 馬場 雄治

城下町松本は扇状地。こんこんと水が湧き、ぼんやりと夏の街灯がともる。無性に懐かしい。虚しさとはこんな空間か。

鶏のふと貌出すや夏座敷 下島 健

下島邸の夏座敷。放し飼いの鶏がひよいと上がる。元氣な中島畦雨も「居たかや」と尋ねて来たりして。回想句である。

推薦候補作をあげる。

瑕疵のなき青梅受くる鬱なる日 木村 安以
病むことも生きる道筋薔薇の風 宮西 秀貴
廃校にチャイムは鳴らず遠郭公 増田 信雄